

ここが知りたいアルコール性肝疾患 —お酒と肝臓の上手な付き合いかたとは？

古くからお酒と肝臓は切っても切れない縁の深い関係であることはみなさんご存知のことと思う。以前からアルコール性肝障害やアルコール性肝硬変として存在していたが、これまではC型肝炎ウイルスによる慢性C型肝炎やC型肝炎硬変、肝細胞癌の罹患数が圧倒的に多い時代であり、厚生労働省において肝炎総合対策の推進として肝疾患診療連携拠点病院を設定するなど、C型肝炎ウイルス対策が肝疾患診療の中心であった。しかし、近年治療薬の発展によりC型肝炎ウイルスがほぼ完治するようになり、肝疾患診療は生活習慣による肝障害が着目されている。1つは非アルコール性脂肪肝炎(nonalcoholic steatohepatitis : NASH)であるが、もう1つは以前から変わらず存在しているアルコール性肝障害である。2024年(令和6年)2月に厚生労働省から「健康に配慮した飲酒に関するガイドライン」が公表され、節度ある適度な飲酒量は1日平均20gと設定されるなどアルコールに対する関心が高まっている。そのため、低アルコール飲料や減酒療法などアルコール摂取を低減させることが社会現象にまでなりつつある。

一方で、アルコールによる依存症や肝障害の問題は依然として大きく、消化器内科だけでなく様々な角度からの対策が必要な状況である。日本肝臓学会では2023年に奈良宣言を行い、慢性肝疾患の指標としてALT 30 IU/L以上という値を設定している。肝疾患の進行を極力抑えるための早期介入を目的としており、肝疾患へ積極的に対応する姿勢をみせている。しかしながら、お酒を問題としている患者を目の前にして、どのように対処してよいか悩む診療場面が多いと思われる。そのため、本稿ではアルコールを取り巻く環境、肝障害の診断から進行度、治療方法、クリニックでの診療、入院管理など多岐にわたる場面を想定して項目を設定している。研修医にもわかりやすく解説されており、本特集を一読することでアルコール診療の一助になれば幸いである。最後に、ご多忙のなか原稿をご執筆いただいた諸先生に感謝申し上げる。

筑波大学医学医療系消化器内科
土屋輝一郎